



写真 2 4 首を切断したタンク山から歩いて5分ほどの所に、事件前から事件後も立てられている看板。

### (3) 事件後の不審事案への接触状況

本事件後も、同地区内で女子小学生を対象とする（事件になりそうな）「変なこと」が、身の周りであったか否かを質問した（表3-3）。

「見たことも聞いたことも無い」という者は15人中の3人（20.0%）に過ぎない。残りの12名（80.0%）は、事件後も女子小学生を対象とする「変なこと」に遭遇している。実際に「見た」という者は1名、「見たし聞いた」という者が4名を占めるが、実際には「聞いた」だけという者が7名と多数を占める。自分の子供から聞いたという者の多いことも考えられ、「聞いた」ということも、十分に問題にしなければならない。しかし同時に、こうした風聞の「噂の世界」が広がり、それがる住民間の相互不信が高まり、さらなるコミュニティの崩壊が進むことも考慮しておかねばならない。

その「変なことの」の内容を見ると、ストーカー的で特に女性の恐怖心の強い行為から、事件となる寸前の行為、あるいは、そ

れを「変なこと」と認定してよいか判断の迷うものまで在る（写真25）。いずれにしろ、こうした「変なもの」を住民が挙げる背後に、日常的に犯罪からの不安感が住民の間で高まっていることが指摘できる。

表 3 - 3 事件後の不審事案への接触状況

	あった			見たことも 聞いたこと も無い	合計
	見た	聞いた	見たし聞いた		
回答者数	1 (6.7)	7 (46.7)	4 (26.7)	3 (20.0)	15 (100.0)

(内 容)

- ・ 声も出さずに付けまわされた（ストーカー）
- ・ 変なモノが落ちていた
- ・ 声をかけられた
- ・ 変なモノを見せられた
- ・ 公園に遊びに行ったらジッと見ていて気持ちが悪く  
帰宅した



写真 2 5 事件現場近くでの変質者注意の張り紙。

#### (4) 今後、こうした事件を防止するため求められる対策

市街地の環境を中心に、今後、どのような対策を進めることを望んでいるかを住民に求めた(表3-4)。

「警察によるパトロールの強化」を望んでいる住民が最も多く、次いで「弱者が利用する通学・通勤のための安全性を強化した道路の建設(防犯モデル道路式)」、そして「街路灯の増設」「住民による定期的なパトロール」があげられている。

従来では忌避される傾向にあった「住民によるパトロール」を多くの住民が挙げているが、それだけ再度発生するのではないかという不安感が強いこと、自分の子供が被害者になる可能性の在ること等が作用しての結果と見られる。

「公園や道路脇の樹木や雑草の整備や手入れ」は、挙げた者が6名と少なかったが、これは既に実施済みであること、また実際にやってみると思った以上に重労働で困ったこと等が作用して賛同者が少なくなっている。ただし、樹木や雑草の整備や手入れの必要は、調査対象住民の全員が認めている。